

とにある。原発巣のコントロールが困難で短期生存しか見込めない例では保存的治療の対象、脳転移巣がコントロールされればある程度の期間、生存が期待される場合には積極的に全摘出をめざしたいと考えている。

4) 外科的治療を行った孤立性転移性脳腫瘍の検討

外山 孚・原 直行 (長岡赤十字病院)
小田 温・玉谷 真一 (脳神経外科)

昭和55年1月～平成1年12月の10年間に当科で外科的処置を受けた single brain metastasis 40例について検討した。shunt 手術や decompression のみの手術は除いた。

Primary lesion は肺癌が25人 (62.5%) と最も多く病理像は腺癌と扁平上皮癌で2/3を占めていた。転移性脳腫瘍手術後の平均寿命は6.2ヶ月。死因をみると原発巣によるもの16例 (40%)、転移性脳腫瘍によるもの10例 (25%) であった。

病理診断と予後を比較すると組織像による違いはみられなかった。肺癌に限って25例の治療法と開頭術後の予後を比較すると根治手術＋化学療法に6ヶ月生存率が高く、転移性脳腫瘍が発見されてから肺癌が発見されたものは6ヶ月生存率が低かった。転移巣発見時の原発巣の状態と予後をみると、primary が cure の場合6ヶ月生存率84.6%、primary が recurrence では0%、他部位転移の場合は50%であった。転移性脳腫瘍の治療と予後をみると、外科的処置単独では6ヶ月生存率は37.5%、外科的＋照射＋化学療法の場合は61.1%であった。予後を決める決定的因子は特でない。

長期生存の要素として、原発巣の治癒、他臓器への転移のないこと、脳転移先行でないことがあげられる。

転移巣手術後5年、10年の生存例を報告した。肺癌原発で小脳、右後頭葉に転移巣があり全摘し照射と化学療法を施行。病理像は腺癌と扁平上皮癌であったが、原発巣転移ともに病理学的な共通点として、癌細胞を取り囲む様に形質細胞、リンパ球、顆粒球が集簇しており、非常に免疫反応が強く現れていた。予後不良例にはこうした病理像はみられず、個体の免疫反応の強さが予後に大きく関係することを示唆する所見と思われた。5年生存率に radiation induced dementia がみられた。CT、MRI で脳萎縮、白質の低吸収域化が著明であった。

5) 転移性脳腫瘍の治療経験

柿沼 健一・大塚 顕久 (長野赤十字病院)
市川 昭道・長島 和彦 (脳神経外科)
西野 和彦

(対象, 方法) 過去5年間に当科で治療を行ない転帰までを追跡し得た転移性脳腫瘍30例について、(1)経過、死亡原因、(2)放射線療法、(3)化学療法、(4)手術療法各々の有効性、(5)原発巣不明例の経過から考察を加えた。(結果) (1)経過: follow up 中の3例 (1～17M) を除いて全例が死亡し、神経学的症状発現からは全経過5D～24M (平均 11.2M) であった。死亡原因は脳転移巣によるもの10例、原発巣によるもの13例、医源性的なもの3例であった。(2)放射線療法は24例に行なわれ、CT上消失、縮小したものは15例だったが、不変あるいは増悪したものは9例であった。また follow up中の3例と3M以内の短期死亡4例を除くと17例中14例が再発し、再発を免れたものは3例であった。再発例は総て12M以内に再発しこのうち10例は再発巣が死亡原因となった。再発を免れた3例は12M以上生存し、原発巣が死亡原因となった。(3)化学療法は8例に施行されたが特に有効と思われたものは無かった。(4)摘出術は10例に行なわれ follow up 中の3例を除く7例全例が死亡し、このうち5例は再発 (4例は手術同部位に再発) した。(5)原発巣不明のものは2例があった。1例は症状発現より10Mを経て原発巣が判明したがこの原発巣により死亡した。(全経過 15M) 1例は78才の高令者で転移巣摘出後経過は良好であったが放射線治療により脳萎縮と全身状態の悪化を来し死亡した。(全経過 6M)。autopsy で silent な原発巣が発見された。(結論)放射線療法と手術療法により症状の一時的な寛快は得られても必ずしも再発は免れず、この原発巣が死亡原因となることが多い。今後はこの観点にたつて放射線療法と手術療法の再検討が必要であると考えられる。

6) 我々が経験した転移性脳腫瘍120例

—その予後に関連して—

西田 和男・小池 俊朗 (新潟市民病院)
清野 修・本多 拓 (脳神経外科)

我々が経験した脳転移癌 120例の中から、現在生存例と消息不明例を除いた100例について述べる。平均生存期間は7.5ヶ月、生存曲線は、5年、3年生存率は1%、2年、1年、6ヶ月、3ヶ月のそれは、5%、23%、43%、71%である。原発癌死40%と脳転移癌死44%で差はない。初発症状が原発巣からと、脳転移巣からでも生存期間に差はない。70才以上とそれ以下との平均生存期間